

今度の転属はどこかなと戦友たちと話していたら青島だということです。ヒョットしたら帰還かと思ったらそのとおりだった。六月十八日乗船し出帆しました。

六月二十五日輜重兵第十六連隊へ帰着しました。岐阜です。中国と違って日本は水も空気もおいしいです。七月に召集解除になりました。淡路島へ帰りました。

以上です。私の兵隊歴は実役三十四か月でした。その後は兵庫県の川西航空製作所に軍属として終戦まで勤務しました。

種々申しあげましたが、何分昔のことなので忘れたことが多く、とくに苦勞したことは忘れて、楽しいことだけが頭に残ります。今思い起こしてお話をと思ってもなかなか至難な問題でした。

— 苦しい事や、いやな事を思いださせまして済みませんでした。いつまでもお元気で。

三十七歳の初年兵

兵庫県 奥浜隆雄

— 奥浜さんの戦歴の概略をお聞かせください。

私は昭和四年徴集で第一乙種の十六番でした(徴兵猶予組)

昭和十九年二月に充員召集で大阪歩兵第一〇八連隊(百四師団・鳳兵団)に入隊しました。通称号「波」集団です。召集で集合したのは姫路の寺院でした。当時私は三十七歳でした。

朝鮮に渡り、朝鮮から南方戦線に行く予定であったようなのですが、朝鮮の仁川港で輸送船が予定通りにこられなくなったものですから、予定を変更して朝鮮平壤歩兵第七十七連隊の咸興分遣隊に入隊しました。

ここで第一期の検閲を受けて新兵教育を終了し、南方要員として上海をへて南京に向かいました。私は南京での滞在が多かったのですが私一人で転属また転属で、あ

まり転属ばかり重ねているものですから私自身なにがなんだかわけが分からなくなったほどです。わかりやすく表現しますと、人に道をたずねる時、「私の行くさきはどこですか」と道をたずねるような錯覚を起こしかねない状態でした。「どこへ行かれるのですか」「それがわからんから聞いているのです」といったぐあい軍隊語でいう(員数外)でした。結局、蚌埠の警備隊の医務室におりました。そのころから敵機の空襲がはげしくなりましたように思います。

昭和十九年の秋、蚌埠では十分な医療手当ができないというところで南京の陸軍病院へ移りました。終戦は天津の陸軍病院で迎えました。とにかく食糧が無く、水が悪いのにはへいこうしました。

私は兵隊であるような、ないような変な存在でした。しかし字を書くことと計算することには自信がありました。なので、行き先、行き先でちょうどうがられましたし、私も自分の持っている才能をいかんなく発揮できたと思っています。中隊事務すなわち出陣名簿の作成、功績関係事務、被服、兵器関係の事務、大隊本部との連絡、

宿営地の部隊の割り当て、宿営家屋の消毒等、毎日が多忙でした。また中隊長からも便利な男として可愛がられました。作戦要務令で定められている戦闘詳報や陣中日誌の作成は私の仕事でした。

昭和二十年十二月の始めから二十六日まで長崎の陸軍病院で入院しながら復員者名簿を書かされほどです。そして私は昭和二十年十二月末に復員しました。

——とくに従軍中の労苦について話して欲しいのが。

戦争にいくことじたいかすべて労苦ですからとくに取り立てて申し述べる労苦は、あったといえはあったし、労苦は覚悟のうえのことですからとくに申しあげることはありません。しかし、食糧が無いことと、水が無かったことです。私もアミバー赤痢にやられたぐらいですから食糧不足で体力が弱っているところへ、赤痢菌が殺到してくるわけですから、病死寸前までいっていたということです。

——南方要員でありながら南京に長く滞在していたというのは、どうしたわけですか。

まずアミバー赤痢にやられたことですが、ついで南方の戦況があまりよろしくなかったことが原因としてあげられると思います。

中支千里を擲弾筒と共に

滋賀県 足利良三

—入隊はどちらでした。

昭和十七年十二月十日現役兵として、敦賀中部第三六部隊に入隊しました。

—それからどうしました。

内地の軍隊生活はごく短いもので、野戦要員として渡支、翌十八年一月九日第百十六師団歩兵第二百二十連隊第二中隊に編入されました。当時中隊本部は黄土嶺にあり、本隊は大別山作戦に出撃していました。そのため警備の隊員は非常に少数でした。

我々はこの黄土嶺とつぎの警備地踏水橋にかけて約三か月、中西誠少尉のもとで、現役三十人が現地特訓教育

を受けました。

私は擲弾筒の専門教育を受け、一期の教育が終るとただちに先輩が汗水を流して築いた朱頭山陣地に配属され、日夜敵と対し警備の明けくれでした。この警備についていた期間中は擲弾筒をうつ機会がなく、はじめての実弾を撃って擲弾筒の威力を知ったのは、常德殲滅作戦中でした。

—どんな感想でしたか。

撃っていくうちにだんだん自信がつき、作戦中に数十発うつうち十分自信がつき、中隊でもどうやら擲弾筒の足利といわれるようになりました。

—特に思い出深い戦闘は。

それは衡陽の雨母山の戦闘です。当時、野津分隊長のもとで擲弾筒手として敵と対じし、陣地を確保していたのですが、突然敵の大部隊の襲撃を受け、前方の高地稜線から耳をつんざくばかりの至近距離からチェッコ軽機の乱射を受けた時のことでした。

私はただちにこれに応戦すべく分隊長に進言すると、分隊長からくらくらやみのなかだから注意して撃てと注意が